

## 研究余滴

(3)

# 〈一心不乱〉ということ——『漾虚集』のライトモチーフ

上 田 正 行

〈一心不乱〉とは脇目もふらずに一つのことに打ち込むことをいう。そのような心の状態を引き起こす代表的なものの一つに恋愛がある。この〈一心不乱〉の恋愛をテーマにしたのが漱石の『幻影の盾』であり、その『幻影の盾』を支えているのが「愛の序」の憲法

と言われる三十一カ条の法則であることは、漱石自身が説明しており私もかつて言及したことがある。作品に頻出する「三十」が「愛の序」の法則の第三十条に照応していたのである。

第三十条 恋スル者は孜々トシテ中断スルコトナク恋スル人ノ姿ヲ思フ。(スタンダール『恋愛論』 大岡昇平訳による)

この〈一心不乱〉というルールに則り書かれたのがキリアムとクララの恋愛譚である。中世騎士道の恋愛は命懸けであり、キリアムの外にもこのルールを守り〈一心不乱〉を成就させたものに「ラ、ベル、ジャルダン」と云へる路を首尾よく三十日間守り終せた「バーガンデの私生子」がいる。

『幻影の盾』ではキリアムの一心不乱が「盾」の中で成就する。それは現とも幻影とも分かぬ境であるが、とに角、〈一心不乱〉と北

方の巨人より譲り受けた盾の呪力でキリアムは至福を経験するのである。

この〈一心不乱〉に注目すると『漾虚集』をはじめ初期作品には面白い共通性が見られる。

『趣味の遺伝』で乃木將軍の新橋での凱旋シーンがあるが、回りの人達のあげる万歳の歓呼に応じかね乍らも、瞬時にそれが「満州の野に起つた咄嗟の反響である」と読み解くところがある。そしてこの「咄嗟」を「至誠の声」と捉え、「意味の通ずる言葉を使ふ丈の余裕分別のあるうちは、一心不乱の至境に達したとは申されぬ。咄嗟にはこんな人間的な分子は交つて居らん。ワーと云ふのである。」「ワー其物が直ちに精神である。霊である。人間である。誠である。而して人界崇高の感は耳を傾けて此誠を聴き得たる時に始めて享受し得ると思ふ。耳を傾けて数十人、数百人、数千万人の誠を一度に聴き得たる時に此の崇高の感は始めて無上絶大の玄境に入る。——余が將軍を見て流した涼しい涙は此玄境の反応だらう。」と説明している。「咄嗟」が〈一心不乱の至境〉であり、〈至誠の声〉であり、

《無上絶大の玄境》に導くものと最大級に誉め讃えられている。漱石語彙に翻訳すると崇高で、尊いのである。將軍は満州の野に散った数十万の兵士の《咄賊》の声を無意識に体现していたのである。

それがためか『吾輩は猫である』では「大和魂はそれ天狗の類か」と皮肉られた「大和魂」が、ここでは同じく「大和魂を鑄固めた製作品」として兵士の形容に使用されているが、「彼等は日本の精神を代表するのみならず、広く人類一般の精神を代表して居る」と高く評価されている。日露戦の終結と共に夥しい死者の数を知らにつけて、たとえ「大和魂を鑄固めた製作品」であろうとも、その死を悼み、帰還兵に尊い精神性を見ようとしたものであろうか。その意味で『趣味の遺伝』は吶喊の《一心不乱》に象徴されるような死を死んで行った多くの兵士への鎮魂の讃となつてゐる。

この観点から見ると河上浩一と小野田の妹の恋も先祖の《趣味の遺伝》というよりは《霊の感応》にポイントを置いて読むべきではなからうか。本郷郵便局で逢つた一瞬に二人は恋に落ちたわけであり、ただ一回の出逢いを浩一は旅順で反芻し聖域に飛び込んだまま上つてこない。死んだら誰かが「白い小さい菊でもあげてくれるだらう」という日記の記述に呼応するかのように、小野田の妹はいつも墓前に白菊を手向けていた。この《霊の感応》の背後に《一心不乱》の精神集があるのは言うまでもない。《霊の感応》は『琴のそら音』でも見られ、津田君語るところのインフルエンザで亡くなった妻が亡くなる前に日露戦場にいる夫の懐鏡に現われるシーンがある。この背後に《一心不乱》のあることは『趣味の遺伝』と同じである。この《霊の感応》は『猫』二章でもW・ゼームスの名を引用

しながら語られており、この期に漱石が強い関心を持っていたことが知られる。尤も『琴のそら音』でも「ロード、ブローラムの見た幽霊」だの、『浮世心理講義録』だの、『幽霊論』などの怪しげな書名の通俗書が多く出ているが、これは当時の流行をかなり皮肉っていると考えた方が妥当である。そのことは国会図書館蔵『明治期刊行図書目録』（一九七二）第一巻「哲学・宗教」の部を見れば一目瞭然である。「心理」の項には明治三十六、七、八年に刊行された夥しい催眠術や心理学関係の書目が上がっており、「心靈研究・迷信」の項にも『心靈の謎』『千里眼』『読心術』『神通力』『幽霊論』等の類書が並んでいる。《霊の感応》などもその意味では時代の流行をそのまま取り入れたに過ぎないとも言えるが、ただその流行に皮肉を浴びせつつも、その底に《一心不乱》という誠々精神性を見ようとするところが漱石の独創と言えようか。

では、この《一心不乱》は『漾虚集』の他の作品ではどのように描かれているのであろうか。まず『倫敦塔』であるが、ポドシャン塔の壁面に残る「横縦の疵は生を欲する執着の魂魄」であり、「只一となり二となり線となり字となつて生きんと願つた」印であり、それは《一心不乱》の「途さと重なるであらう。その《一心不乱》をそのまま生きたかの如く描かれているのがジェーン・グレーである。『カーライル博物館』は単なる見聞記のようにもとられるが、この作品には「四」が巧みに使用されていてそれが「四角四面」に生きた頑固一徹なカーライルその人のシンボルであることはかつて論じた通りである。現代文明に背を向け四階の屋根裏部屋に籠り、その内面世界を守り通した生き方は、ある意味では外部の一切に協目

もふらない「一心不乱」の生き方であったとも言える。

禅的小説の『一夜』は漠然としており、かつ悠揚迫らぬところは最も「一心不乱」に遠いようであるが、よく読むとこの小品もこのテーマにつながるものを持っている。作品の終りの方に「又思ふ百年は一年の如く、一年は一刻の如し。一刻を知れば正に人生を知る」とも、「彼等の一夜を描いたのは彼等の生涯を描いたのである」ともある。それで言うところの値千金の一刻がこの小品で描かれたことになる。

どこが千金に値するのかは必ずしも明確ではないが、このテーマは『幻影の盾』のラストでも鳴っていた。「百年の齢ひは目出度も難有い。然しちと退屈ぢや。衆も多からうが憂も長からう。(略)百年を十で割り、十年を百で割つて、剩す所の半時に百年の苦楽を乗じたら矢張り百年の生を享けたと同じ事ぢや。」とある。瞬間の絶頂に至福があるというこの主張はこの期における漱石の独特の美学を垣間見させる。そして、この至福が「一心不乱」という精神集中の状態において達成されることを『幻影の盾』は物語っている。これに対して『一夜』にはこのような精神集中は特に見られない。しかし、この作の僅かな時間の経過に語り手が「壺中の天地」を見ているのは間違いない。とすれば、そこに悠揚迫らぬという独特の「一心不乱」を見ていたとしても不思議ではない。

『薙露行』は代表的な騎士道物語、『アーサー王の死』を下敷きにしているので、宮廷恋愛の三十一カ条が機能しているのは言うまでもない。ここには「一心不乱」の恋が三つ描かれている。一つはいうまでもなくランスロットとギニギアの恋であり、これが物語の中

心であるが作品では始めの「夢」に二人の恋が少し描かれるのみで、中心はシャロットの女とエレインのランスロットに寄せる思いである。シャロットの女は鏡の中に住しきれずに窓より顔を出すことで命を落としてしまう。これは利那の恋に生命を懸けたのであり、後の『草枕』の那美さんにつながる。エレインの恋はその遺書に詳しい。「天が下に慕へる人は君ひとりなり。君一人の為に死ぬるわれを憐れと思へ。」がそれである。亡骸を乗せた舟を先導する白鳥はエレインの化身の如く美しい。この恋は宮廷恋愛三十条を持ち出すまでもなく「一心不乱」の恋である。

こうみてくると、『漾虚集』全体を貫くものとして中世騎士道物語の中心をなす愛の法則に代表される「一心不乱」というライトモチーフがありそうだと言える。しかし、これには漱石の創意工夫がかなりある。中世の騎士道物語の恋愛が漱石が『漾虚集』で描いたようなものでなかったであろうことは、例えば『薙露行』の前置で分かる。「実を云ふとマロリーの写したランスロットは或る点に於いて車夫の如く、ギニギアは車夫の情婦の様な感じがある。此一点丈でも書き直す必要は充分にあると思ふ。」とあるが、この説の正しいことは『アーサー王の死』(『筑摩世界文学大系』10)を読めば瞭然である。二人の交情がかなり卑俗、卑猥に描かれており、そこに高い精神性を求めようとする読者の期待を裏切っている。この猥褻さと愛の三十一カ条がどう結びつくのかは今後の研究課題であるが、このままでは近代人の鑑賞に堪えないことは明らかである。そこで漱石はこれに高い精神性を与え近代小説として再生させたのである。そのために『幻影の盾』『薙露行』は現代の読者の鑑賞に充

分、堪えるものとなっているが、元の話がこのようなロマンチックなものでなかったことは注意しておいてよい。

このことも関係するが『漾虚集』の諸作品が登場した時、「帝国文学」(明39・2)が「夢幻派の鏡花と漱石」と括ったのは重要である。「泉鏡花」と夏目漱石とは、共に此種の不可思議なる、詩魂と才筆とを有する人也」「或は空想を趁ひつゝ、或は直覚を辿りつゝ、現実の中に奇異を覘じ、夢幻の間に真実を觀るところ、確かに同類項中の作家と謂ふべし」というのがその触りであるが、この〈夢幻派〉の傾向は出発期の漱石に元々、あったものとも考えられるが、一方では意識的に取られた姿勢であったことも事実である。『薙露行』の中にシャロットの女が口ずさむ歌、「うつせみの世を、／うつゝに住めば、／住みうからまし、／むかしも今も。／うつくしき恋、／うつす鏡に、／色やうつるふ、／朝な夕なに。」があつたが、ここで〈現<sup>うつ</sup>鏡と〈鏡〉の世界が対比され鏡の世界が〈現〉以上の意味をもつて語られている。この〈鏡〉の世界の重視は言うまでもなく〈夢幻〉の世界の重視であり、それを漱石は自ら選び取っている。しかし、この世界に亀裂の入るであろうことは、シャロットの女が鏡の中に住めなくなること、アイロニカルに語られている。その意味では漱石は始めからこの二つの世界に引き裂かれており、両者の激しい対立、葛藤の中に漱石文学が緊張を孕みつつ展開して行くであろうことを思わせる。

ともあれ、この夢幻への志向が十篇の英詩となり、それが散文化されて『漾虚集』となつたと思われる。

〈一心不乱〉が『漾虚集』以後、どのように展開するかは、例え

ば『草枕』で検証してみよう。『草枕』で〈一心不乱〉が出てくるのは初めの雲雀のシーンである。「雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全体が鳴くのだ。」「成程いくら詩人が幸福でも、あの雲雀の様に思ひ切つて、一心不乱に、前後を忘却して、わが喜びを歌ふ訳には行かない。」とある。この「魂全体が鳴く」状態は「一心不乱」こそ画工が希求し漱石が希求していたものだ。

この「魂全体が鳴く」を画工は「自分の心が、あゝ此処に居たなと、忽ち自己を認識する様にか」くことと言ひ、言葉替えて「只恍惚と動いて居る」さま、即ち物我一如の境と自解している。この意識の連続の瞬間は「感興のさした刻下の心持ち」でもあり、この「時なき断面」を画にしようとするのが画工のねらいであつた。この瞬時に成立する美は『草枕』では刹那の美、那美の名詮自性になつており、〈儚れ〉を指すのは言うまでもない。画工が恍惚の境にいる状態と那美さんの表情に浮かぶ〈儚れ〉とは次元が異なるようにも思えるが、画工はこの刹那に物我一如の状態に在るわけで、ここで意識の連続というテーマと「感興のさした刻下の心持ち」というテーマが同時に達成されたと考えるべきである。その意味でこの〈儚れ〉とは「魂全体が鳴く」「一心不乱」の状態でもあると言える。

『漾虚集』『草枕』では共通してこの瞬間の美が追求されてきたわけだ、ここに現の時間を一瞬に凝縮させようとする〈夢幻派〉漱石の一貫した姿勢が読みとれるのであり、それが最も完成したスタイルで書かれたのが『草枕』であると結論づけることができる。以後の作では『草枕』にも見える如く、〈正〉〈義〉〈直〉というモラルが

かなり強烈に出て、『二百十日』『野分』『虞美人草』という作品に「一心不乱」は継承されて行く。『二百十日』の圭さんにも、『野分』の高柳周作にも、『虞美人草』の宗近君、甲野さんにも烈々たる「一心不乱」がある。それまでの瞬時に成立する「一心不乱」がかなり美的なものであるのに対して、以後のそれには「正」「義」「直」の道義が加わったことが著しい特徴である。このことは『草枕』を書き終って、すぐにこれを否定する鈴木三重吉宛書簡（明39・10・26付）とビタリと照応している。「美」の世界にだけ止ることを潔しとせずに、現実に一歩踏み出そうとする漱石の姿勢は明らかである。

『猫』を書き余裕派、低徊派と見られていた漱石が、同時期にそれと対立するが如き「一心不乱」というテーマに拘泥わっていたことを忘れてはならない。現実から飛び出し現実に拮抗する一瞬を捉えようとする「美」的志向の強い「一心不乱」と、現実に向かおうとする「道義」的志向の強い「一心不乱」は、一方から一方への移行という単純な道筋を辿らない。例えば、『夢十夜』（明41）でもこの二つは同居する。第一夜の「一心不乱」は美しい夢である。第五夜は女の「一心不乱」を踏みにじろうとする「天探女」への激しい憎悪がある。第九夜も同様である。人間の誠意を否定する悪意に対して漱石は極めて敏感である。二つの「一心不乱」が時には拮抗したり、融合しながら漱石の世界を形成して行くのは明らかであり、初期作品に止らない普遍性を持つ。

注

(1)(3) 「漱石と『数』」——『カーライル博物館』を中心に——  
（『言語と文芸』平2・1）

(2) 『趣味の遺伝』のモチーフや時代的背景を考えれば漱石が東京帝国大学に勤務していたということが重要な意味を持つように思われる。周知の如く日露開戦には帝大の「七博士意見書」（『東京朝日』明36・6・24）が世論操作に大きな影響を及ぼした。就任早々の漱石がこのような大学全体の持つ開戦的雰囲気に対して特に異和を覚えたように思われない。そのような雰囲気と同調するような好戦詩「従軍行」（『帝国文学』明37・5）が書かれている。又、『東洋学芸雑誌』（明38・2・25）を見ると、一月二十日に大学が休講となり運動場で戦捷祝賀会が盛大に開催されたことが記されている。各種の行事が終り「午後五時より職員学生々徒一同復た運動場に参集し総長は過刻決議せし両大将への頌功状贈付の手續を終りたる旨を告げ次で其発声にて日本帝国の万歳を三唱し直に祝宴に移る」とある。山川健次郎総長が認めた東郷、乃木両大将への頌功状は同号に掲載されており、総長の「祝賀式演述」は次号（3・25日号）に掲載されている。「正門に於けるアーチ燈赤門に於けるイルミ子イション運動場に於ける万歳表字の飾り瓦斯」等、大学は祝賀一色で大学を挙げての行事であることが明瞭である。従って帝国大学出身者から戦死者を出したということとは、帝国大学がこの戦いの一翼を確実に担っており国家とのより緊密な関係を物語るものとして学生、教職員に強く意識されたであろう。犠牲者があつたからこそ祝勝の意味が倍加されるので

ある。三月二十五日号には大学出身者十三名の名前が列記されている。例えば次の如く。

陸軍歩兵少尉勲六等功五級工学士 河原一郎

三十七年九月二十一日旅順北門老爺山二百三高地攻撃の際清国盛京省大平溝東南方高地に於て戦死

陸軍歩兵少尉正八位農学士 足立美堅

三十七年十一月二十八日旅順口二百三高地堡壘突撃の際戦死

もうお分りであろう。河上浩一は二十八、九歳の歩兵中尉で明治三十七年十一月二十六日の杉樹山総攻撃で戦死したのである。

これにピタリと対応する帝国大学生出身者はいないが、旅順陥落の犠牲になった出身者はいるのである。大学に勤める金之助としては大学を代表してこれら若き卒業生の鎮魂のためにこの小品を書いたのではなからうか。河上の友人である「余」は学者であるが、学者である故に戦場に出かけずに済んだ者の後ろめたさが河上浩一の墓参にも感じられる。帝国大学出身者への鎮魂の譜を直接のモチーフとしてこの作品が書かれたと取りたい。